



— Zoonosis 各論 —

### Ⅲ. 非特異的症候を呈す Zoonosis 総論

#### ～ 診断に苦慮する症候・未病～

荒島康友 Zoonosis 協会 副理事長 (日本大学医学部病態病理学系臨床検査医学分野 助教)  
 矢久保修嗣 Zoonosis 協会 副理事長 (日本大学医学部内科学系統合和漢医薬学分野 准教授)

〔遭遇するであろう診療科〕

内科 (総合・一般等)・耳鼻咽喉科・小児科・  
 心療内科・精神神経科等

#### はじめに

Zoonosis の中には、非特異的症候を示す感染症が存在する。しかし、吉田 博氏 (公立八女総合病院 企業長) が断言したように、「まず、初めに Zoonosis を疑わなければ診断はできない (念頭にないと診断できない)」(第8回・2011年12月号)。そのため診断に至る症例が少なく、Zoonosis の全体像が把握されていないのが現状である。

そこで今回より、現在までに確認し得た非特異的症候を呈す Zoonosis を連載する。今回は初回となるので、非特異的症候を呈す状態について若干の説明をしておく。

われわれが文献を検索したところ、「非特異的症候を呈す疾患」に該当する確固たる定義を記述したものは確認できなかった。「非特異的症候」を他の表現で言い換えてみると、「診断に苦慮する」、「病気の前段階」、「健康と病気の間」、「未病 (半病気状態)」、「不定愁訴」で表現できるのではないかと考えられる。そこで、医学関係の学会について調査したところ、病態解析の側面から、思考し解析を進める上で、「未病」が最も的確と考えられたことから、ここでは未病を中心に話を進める。

#### 未病とは？

##### 1. 概論

まず、「健康」と「病気」とは何だろうか？ 世界保健機関 (World Health Organization : WHO) の「健康」の定義では、「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」と規定している。「病気」とは、日本未病システム学会<sup>1)</sup>では「自覚症状も検査の異常もある状態」としている。その中間の、半病気状態を「未病」と表現している。

未病の定義に入る前に、著者らが考える年齢経過に伴う「健康・未病・病気」の人口動態の概念を図1に示した。

生涯を通じ、生後は「健康 (A)」な状態のヒトが多く、年を取るにつれて「未病 (B)」と「病気 (C)」が増加し、さらに、高齢へと移行するに従い、B < C となっていくと考えられる。実際のところ健康と病気の間には様々な連続的段階があり、この段階が未病と考えられている。つまり、明確に健康・未病・病気を判別できるものではなく、曖昧さが存在し、それぞれの研究者や医師によってとらえ方が異なってくる。

いずれにしても、「病気 (C)」から「未病 (B)」へ、あるいは、「病気 (C)」から「健康 (A)」へ戻すことは、医学的にも、時間的 (物理的) にも、経済的にも、大きな労力を必要とする。一方、「未病 (B)」



表1 未病の分類

未病	検査結果	自覚症状	例	治療	予後
西洋型未病 (M-1)	異常	無	多くの疾患初期 境界域高血圧症・境界域糖尿病・高脂血症・肥満・高尿酸血症・動脈硬化・骨粗鬆症・無症候性蛋白尿・無症候性脳梗塞・脂肪肝・B型肝炎ウイルスキャリア・インスリン抵抗性・潜在性心不全・シンドロームX・メタボリックシンドローム等	最近、治療が され始めた	放置により 重症化する
東洋型未病 (M-2)	正常	有	何となく調子が悪い状態 倦怠感・疲れ・食欲不振・元気減退・肩こり・しびれ・のぼせ・めまい・冷え等 ZoonosisのQ熱 (QFS) ・パスツレラ症・猫ひっかき病等	治療対象	放置により 大病になる*

\*貝原益軒「養生訓」

図1 著者らが考える「健康・未病・病気」の人口動態（概念）  
～生涯を通じた健康から病気までの推移～

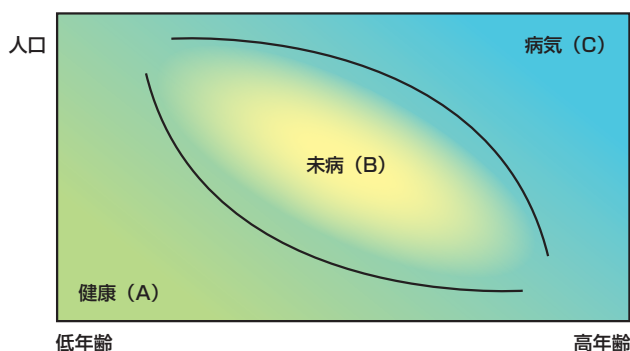


表2 西洋型未病 (M-1) 細分類

M-1 A	一般検査で異常があるもの
M-1 B	特殊検査で異常があるもの
M-1 C	遺伝子レベルで異常があるもの

生涯を通じ、生後は「健康 (A)」な状態のヒトが多く、年を取るに従い「未病 (B)」と「病気 (C)」が増加し、さらに、高齢へと移行するに従い、B < C となっていくと考えられる。しかし、実際のところ健康と病気の間には様々な連続的段階があり、このような健康と病気間の様々な段階が未病と考えられている。

から「健康 (A)」へ導くための労力は、前者の労力より著しく少なくて済む。今後「患者」ならぬ「未病人」にとっても、医療経済学的にも、大きなテーマとなっていくと考えられる。

未病の概念は、いまだ完全には確立されていない。しかし、最近では予防医学への関心の高まりに伴い、辞書にも「未病」が掲載され始めている。今西二郎氏（前・京都府立医科大学大学院 教授、現・明治国際医療大学 教授）も「概念は古代中国からあったもので、はっきりとした病気ではないが、全くの健康でもない状態（病気の前段階あるいは半健康な状態）をいう。（中略）今後、現代医療でも未病の対策に取り組む必要がある」さらに、「未病は、生活習慣、老化、ストレス、環境問題等と密接に関連して起こってくる。すなわち、最も現代的な社会現象として未病をとらえることができる」と述べている<sup>2)</sup>。

日本未病システム学会<sup>1)</sup>の言に従うと、未病とは、西洋型未病 (M-1) と東洋型未病 (M-2) を合わせた状態とされている (表1・2)。西洋型未病 (M-1)

とは、自覚症状はないが、検査結果に異常がある状態。東洋型未病 (M-2) とは、自覚症状はあるが、検査結果に異常がない状態のことである。換言すると、診断基準を満たし病名をつけることのできる状態、すなわち「病気」に至っていないために、明確な診断名がつけられない状態、あるいは、まだ医師を受診せず診断されていない状態といえる。

## 2. 患者の状態

西洋型未病 (M-1) では、メタボリックシンドローム、境界域にある糖尿病や高血圧症、高尿酸血症、肥満、脂肪肝等、医学会で現在話題となっているものである。

東洋型未病 (M-2) では、倦怠感、元気減退、肩こり等、通常よくある症状である。Zoonosis のパスツレラ症、Q 熱（特に post Q fever fatigue syndrome : QFS）、猫ひっかき病 (CSD) 等も含まれると考えられ、報告数は少ないものの増加しつつある。

### 3. 治療

西洋型未病 (M-1) では、確固とした治療法はないとされていたが、最近では治療がなされ始めている。東洋型未病 (M-2) では、東洋医学における未病の概念であり治療対象となる。前述したように、ペット由来の Zoonosis の中にはこのような病態を示す感染症が存在し、近年では報告が増加傾向にある。

また、治療について現時点では 2 段階に分けるとする考えもある。未病 1 は、患者が自分で治せる段階であり、休養し、禁煙、節酒、食事や運動に留意するセルフメディケーションで治癒できる段階。未病 2 は未病 1 を補完するもので、健康食品 (サプリメント) や薬品・漢方、鍼灸等、医療関係者の支援を必要とする段階である。

### 4. 対策

最も重要なことは医療関係者や一般の人々に対する教育である<sup>2)</sup>。

ちなみに、2,000 年以上前の中国・前漢末期時代の医学書『黄帝内経』に「未病の時期に治すのが聖人 (名医)」といった記述の存在が指摘されている。日本でも江戸時代の貝原益軒の著書『養生訓』に、病がはまだ起こらない状態では養生が必要だが、そのまま放置しておけば大病になると記載されている<sup>1)</sup>。

これを証明するように、現代の公衆衛生でも予防医学は重要な要素であり、疾病予防が一次予防 (健康増進・疾病予防)、二次予防 (早期発見・早期治療)、三次予防 (リハビリテーション・社会復帰) に分けられている。未病はこの中の狭義で二次予防を意味するが、広義では一次予防まで含んでいる、と解釈されている。さらに、一次予防は、二次予防または治療に勝るとしており<sup>3)</sup>、未病に対する対応の重要性を指摘している。

## 次回からの掲載予定 <疾患と症例> ～ 診断し難い患者に Zoonosis の可能性 ～

Zoonosis である Q 熱 (QFS)、パストツレラ症等においては、一見しただけでは病状あるいは病変部

が軽度の状態で、一般的な検査を行っても確固たる異常を認めず、原因も不明なことがある。そうした場合、医師が「よくある症状で、特に気にすることはないのではないか」と考える事例をわれわれも経験してきた。しかし、患者本人は中～重症の症状を訴えている。今まで診断され得なかったこのような「病変部と患者の自覚症状との乖離のある」症例が確認され始めている。

次回より、以下の症例について話を進めていく。

- ① 微熱と倦怠感を主訴にドクターショッピングをし、医師には「よくある症状・そのうち治る」と言われ続け、遺書を書いていた Q 熱 (QFS) 症例<sup>4)</sup>
- ② 【トピックス】抑うつ状態から自殺した Q 熱症例<sup>5)</sup>
- ③ 主訴が耳痛のみでドクターショッピングをし、救急車で 2 度搬送された Q 熱症例
- ④ 登校拒否 (不登校) に陥った Q 熱症例
- ⑤ 主訴が咽喉頭違和感のみでドクターショッピングをしていた、咽喉頭の軽度発赤程度であったパストツレラ症等を紹介していく予定である。

現代病ともいえる未病には、Zoonosis の一部の感染症も含まれている。そして、未病に対し真に対応できるのは、水準の高い西洋医学に基盤を置き、かつ、東洋医学が伝統的に存在する日本ではないかと考えられる。

今回からの非特異的症候を呈す Zoonosis の連載により、「未病」から「健康」へ、また、「診断し難い Zoonosis」から「確定診断」への発展が期待される。

#### 文献

- 1) 日本未病システム学会: <http://www.mibyouty.jp/>
- 2) 今西二郎: 未病の医学、未病の概念、医学のあゆみ別冊, 1-5, 2001.
- 3) 徳留信寛: 未病の医学、公衆衛生と未病、医学のあゆみ別冊, 6-9, 2001.
- 4) Arashima Y, Yakubo S, Nagaoka H, et al.: A patient in whom treatment for *Coxiella burnetii* infection ameliorated a depressive state and thoughts of impending death. *IMJ* 19, 70-71, 2012.
- 5) Yakubo S, Ueda Y, Tanekura N, et al.: The first case of a patient suffering from *C.burnetii* infection committing suicide arising from a state of depression. *IMJ* 19, 312-313, 2012.